

井伏鱒二『へんろう宿』

——棄て児を救う隠れ宿——

武 田 秀 美

要旨 昭和の代表的作家の一人、井伏鱒二の短編小説『へんろう宿』は、室戸岬へのバスの中で見かけた小さな宿に着想を得て「空想」で書いた作品とされ、先行研究においても、作者の想像力による創作として論じられている。しかし、へんろう宿の設定や生活している人物像には、強い存在感とリアリティがあり、すべてを「空想」とするには、強い疑念が残る。なぜなら、巡礼の遍路道に「へんろう宿」を設け、遺棄された嬰兒たちを、何代にもわたり海辺の住人達が、「お接待」の心によって救い、養い育て、支援し続ける仕組みは、一人の作家の想像を超えるものと思われるからである。井伏が、類似の施設についての見聞から、それに基づいて執筆したものの、宿の女性たちを世間の好奇心から守るために、「空想」による作品、とした可能性は否定できないのではないか。

本作品には、漁師家を流用した粗末な宿屋という設定、三人の老女と二人の少女という卓越した人物造型、見事な作品の構成などを通して、肉親の愛を知らない棄て児たちと、愛児を棄てざるをえなかった母親たちに対する、地元の人々の、へんろう宿を設け、彼女たちの生活と生計の場を確立し、生育と成長を陰ながら見守る慈悲の心と思いやりと温かい愛が描かれている。そして、棄てられたにもかかわらず、へんろう宿で自立して、健気に生きてきた婦女子たち相互の強い絆と共存共生の愛の生涯が描かれている作品である。

井伏は、昭和四年三月に発表した作品『朽助のいる谷間』において、主人公朽助と混血児の孫娘「タエト」

の存在を通して、キリスト教の愛の精神と救いを描いているが、『へんろう宿』では、仏教の慈悲と救い、四国遍路の巡礼者への土地の人々の「お接待」の温かさ、返礼の「接待返し」の精神への深い理解を基に、作品を構築していることは、高く評価すべきであろう。

作家としての並外れた資質と感性と創作能力により、人間の「生」に対する真摯な姿勢と、仏教への理解と深い造詣を基盤として構築された、人間にとって最も重要な、他者への思いやり、慈しみ、愛、そして、宗教の救いという深いテーマを重層構造として底に秘めた傑出した作品と考えられる。

キーワード…仏教の「慈悲」、四国遍路の巡礼文化、棄て児の愛の救済

一 はじめに

『へんろう宿』は、昭和十五（一九四〇）年四月、作者井伏鱒二が四十二歳の時に、雑誌『オール読物』に発表した名作である。わずか原稿用紙十一枚足らずの本文で、これほど深く優れた作品の世界を構築していることから、井伏鱒二の作家としての並外れた資質と感性と創作能力、人生に対する真摯な姿勢と宗教に対する深い造詣を窺い知ることができる。

拙稿では、この『へんろう宿』における井伏鱒二の優れた創作技法とテーマ、さらには、この作品世界を構築した意義などについて考察してみたい。

1 作品の成立背景

この作品の成立背景について、井伏鱒二は、次のように話したと言われている⁽¹⁾。

田中貢太郎さんが病に倒れ、お見舞に四国に出かけた時、室戸岬に行くバスの中から、二階建ての小さな宿屋に、へんろう宿、一泊三十五銭と書いてあるのを見て、空想で書いてみたもので、むろん泊ったわけではない。土佐ホテルで書いている時、田岡君がやってきたので、土佐弁を直してもらった。あの辺の浜木綿の色が何ともいえない良い色だったのに感心したりして、抒情で書いた。

この井伏の発言を踏まえて考えると、『へんろう宿』は、全て作者の「空想」により創出された作品世界ということになる。そして、従来の研究においても、この作者の自注を踏まえ、作者の空想、想像力によって創出された作品世界として論じられてきている⁽³⁾。もちろん、小説は、たとえモデルとなる人物や出来事などを基とした創作であっても、あくまでも作者の言語芸術作品として創出されたものであり、本作品に見られる井伏の想像力や創作力の卓越した実績が高く評価されることは言うまでもない。

しかし、へんろう宿に泊まった客に棄てられた女の嬰兒（みどりご）たちが、太平洋に面した四国の海岸の漁師の集落にある粗末なへんろう宿に救われて育てられ、長じるとそのまま宿の一員として働き続けて、各人がその生涯を終えるという、本作品の「棄児救済の宿」の存在や、その救済システムまでもが、全て作者の空想による創造の産物なのであるか。作品を繰り返し読み返すにつけ、作中のへんろう宿やそこに生きる女性たちの人間像には、強い存在感と相応のリアリティがあり、全てを「空想」とするには、拭いきれない疑念が残る。憶測かもしれないが、四国を巡礼するお遍路さんや旅人たちの貧困や病い、あるいは特別な事情により置き去りにされた女の棄て児たちが、土地の人たちのお遍路さんに対するいわゆる「お接待」によって助け育てられ、やがて成長し、働き自活することになった宿というのが、実は現実存在し、それを旅で見聞した井伏が、その見聞を踏まえて書いたのではないか、と思われてならない。たとえ、作家としても、これほど見事な棄児の救済システムと、その背後や根底に存

する慈悲や救いの心の創造は可能とは思われない。

四国では、総延長千五百キロメートル、あるいは千二百キロメートルとも言われ、総日数五十日以上を費やすとも言われている、弘法大師空海の霊場四国八十八か所の巡礼の旅をする人々、「お遍路さん」を温かくもてなす行い、いわゆる「お接待」をすることで、自らも救われるという教えから、「お接待」が伝統的に実施されてきたと言われている。この遍路文化による仏の慈悲と救済による土地の人々の慈しみ、思いやりと愛により、哀れな棄児救済の宿が実在しても不思議は無いと考えられる。社会的な弱者の存在は、当事者の名誉や、人々の逞しい憶測や噂話などへの配慮から秘められることも多く、作者井伏鱒二は、あえて、「空想で書いてみた」と述べて、作中の地名も「遍路岬村字黄岬」という架空の地名とし、場所や人物などが特定されないように配慮したのではないか、と思われてならない。

さらに、作者が、自らの作品、たとえば、『駅前旅館』や『本日休診』『荻窪風土記』、名作『黒い雨』などの創作にあたり、その緻密な取材や記録や事実などによって創作を行っている作家である事実を考えると、この作品の内容すべてを「空想」と受け止めることには、大きな疑問が残る。

真偽のほどは、今となつては、作者に確かめる術もないが⁽³⁾、いずれにしても、本作品が執筆された背景や根底に、仏教における「慈悲」の精神や、「四国遍路」という弘法大師空海による救いと信仰、また、四国八十八か所の霊場の遍路をするいわゆるお遍路さんに対する地元の人々の、「お接待」という四国の遍路道周辺の人々に培われた独自の慣習や精神風土や伝統文化などについての作者の深い知識と理解とがなければ、これほどの作品世界は描かれなかったと思われる。

したがって、以下『へんろう宿』の作品世界の分析を行い、巧みに描かれている四国遍路の精神風土と救いのテーマを基に構築された作品世界やテーマについて、考察することとしたい。

二 作品世界の背景について

1 時代背景

『へんろう宿』に描かれている時代は、登場する「十二ぐらい」と「十五ぐらい」の女の子が「遍路岬村尋常小学校児童」とされていること、また、へんろう宿の宿代の値段設定が、「御一泊一人前、三十銭」とあることから、昭和十年から十五年と考えられる⁽⁴⁾。

まず、作中の十二歳と、十五歳ぐらいの少女が尋常小学校に通っているとすれば、尋常小学校の就学年齢が満六歳から十一歳までの六年制となった、一九〇七（明治四十）年以降であることは、明らかである。さらに、一九四一（昭和十六）年三月には、国民学校令により、尋常小学校が「国民学校初等科」と改称されるため、作中に描かれている時代は、一九四〇（昭和十五）年以前の時代と考えられる。

また、「漁師屋をそのまま宿屋にした」と見られるへんろう宿は、「狭い土間」と「狭い」入口の居間に続いて、三つの客間が、襖で仕切られて並んで続いているだけの「薄ぎたない宿」で、主人公が用いる蒲団も「雑巾を大きくしたような蒲団」とあるように、粗末きわまりない宿である。その宿代が一人一泊三十銭ということは、時代設定は、本作品が発表された昭和十五年頃と考えるのが妥当と考えられる。なぜなら、昭和十年～十五年頃の価格は、例えば、鉛筆一本が三銭から五銭、「岩波文庫」が二十銭（昭和二年～十八年）、映画の料金は五十銭～五十五銭、国家公務員初任給は七十五円（昭和十年）であり、その時代であれば、三十銭という宿代はきわめて安い料金設定であり、四国八十八か所を巡る長旅で、少しでも安価な宿を求めるお遍路さんの実態に即して設定された、いわゆる「お接待」の心が現れた宿代と考えられるからである。

2 作品の舞台の背景

次に、作品の舞台背景について、見てみたい。

作品の舞台は、高知県の安芸町から六里離れた「遍路岬村字黄岬」という部落となっている。これは、国土地理院の二万五千分の一の地図にも存在しない架空の地名であり、場所の特定は難しいものの、「安芸町から六里（約二十四キロ）」という作中の設定を基に、地図を見てみると、海岸沿いの安芸駅から室戸岬へと至る海岸沿いの約二十四キロ圏には、二十七番札所の神峯寺（こうのみねじ）がある。このことから、この周辺の海辺の集落にお遍路さんが宿泊するへんろう宿の存在が設定されたと考えられる。

さらに、この場所は、「街道の両側に平屋ばかりの人家がならび、一本道の部落」として描かれており、「平屋ばかり」とある⑤のは、貧しい漁師部落であるとともに、海岸通りの海風を避けるための現実的な建家であることを示したものであろう。

なお、作者の見事な創作技法として指摘できるのは、集落の背後に存在しているはずの太平洋の潮騒や、海風などには一切言及していないことである。これについては、後の「四 作者の表現の特色」の章で述べることとしたい。

三 作品の構成と登場人物

1 作品の構成

次に、作者の巧みな作品構成について見ておきたい。本作品は、無駄のない、見事な「起・承・転・結」の構成となっている。

まず、「起」の発端は、主人公の土佐での所用が上首尾に運んだこと、そして、安芸町へ行くためのバスで居眠

りをして遍路岬村字黄岬まで乗り過し、終バスもないため宿をとることになるという経緯が示される発端部すなわち「起」の部分が置かれている。

「承」では、主人公が一泊することになったへんろう宿「波濤館」の土間や居間、そして三部屋しかない客間の狭い間取りや「薄ぎたなく」粗末なしつらえ、しかも、五人もの女中の存在（老女三人と少女二人）、一人の宿泊している先客の様子などが紹介される。

そして、「転」では、隣室の泊まり客と老婆との会話を通して、その宿では、およそ十年ごとに女の子の棄て児があるとそのまま育てられ、その子たちだけが宿で働き、次の棄てられた嬰兒を育てつつ、宿の一員として働き、共に生き続けてきた、という真相が明らかにされるクライマックスを迎える。

そして、「結」で、翌朝を迎え、主人公は、恵まれない境遇に生まれ育ちながらも明るく健気に生き続ける三人の老女と二人の少女を新たな目で見直して宿を立ち去ることとなる。

見事な短編小説の、典型的な構成を看取することができる。

なお、この作品構成において、主人公の「眠り」という要素が、「起」の場面の語りにおいて、また、「転」の場面でのオクラ婆さんが語る希有なへんろう宿の女たちの人生の語りの始めと終わりにそれぞれ設定されているのは、作者の巧みなストーリー構成と言えるが、この点については、後の「四 作者の表現の特色」において述べることにしたい。

2 登場人物

次に、本作品の登場人物がどのように描かれているかを、それぞれ見てみたい。

(1) 主人公について

主人公の「私」は、年齢も職業も不詳のまま終始し、所用のため土佐にやってきた男として描かれている。昭和十五年という時代でありながら、手拭いでなく「ハンカチ」を持っているところから、都会で暮らしている、いささかハイカラな男であることが分かる。

へんろう宿の意外な秘密と真実を見聞することとなる主人公として、設定されている。

(2) 大きな男の宿泊客について

主人公のほかに、もう一人登場する宿泊客は、中年の「腹這いになって鉛筆を舐めながら帳面を見つめてい」る大きな男であり、「算盤をはじく音やバラ銭を勘定する音」を立て、一日の商いの日銭勘定をしていることから、行商人であろう。酒の相手をする「オクラ婆さん」に向かって「婆さん、もう一つ飲めや、酒は皴のばしになるちゅうわ」などという世慣れた物言いをする人物で、当時のありふれた行商人の男を設定することで、この作品にリアリティを与えるとともに、へんろう宿という、特殊で浮き世離れた棄て児の女性たちの別世界を巧みに成り立たせているものと考えられる。

(3) へんろう宿の三人の老女と二人の少女

次に、へんろう宿で働きつつ、そこで暮らし続けている三人の老女を見てみたい。

まず、「オカネ婆さん」「オギン婆さん」「オクラ婆さん」という三人の名付け方には、作者のユーモア精神とともに、彼女たちの境遇を表す巧みな表現が看取れる。すなわち、その名前は、「金」「銀」「倉」という「富」を連想させる名前であり、実際は宿泊客も少ない宿に働き、慎ましく暮らしている彼女たちの現実とはかけ離れてい

るものの、棄て児たちを引き取った人々が、経済的な不遇を避けることを願って付けた粹な名前として、作者が案出した名前であろう。

そして、オカネ婆さんは、「痩せていて細い顔」の「八十ぐらいの皺くちやのお婆さん・極老のお婆さん」であり、オギン婆さんは、二番目に高齢の「背が低くて太って」る「いわば白のような、という形容が適当」と表されているお婆さんである。三番目のオクラ婆さんは、「中肉中背で、以前はいい顔だちだったろうと思われる目鼻だちに見え」るお婆さんで、本人が「五十年もまえに棄てられた嬰兒」と語っていることからすると、年齢は、五十代と思われる人物設定となっている⁽⁶⁾。

この三人は、それぞれ棄て児であり、行商人風の男にオクラ婆さんが「三人とも、嬰兒のときこの宿に放つちよかれて行かれましたきに、この宿に泊まった客が棄てて行つたがです。いうたら棄て児ですらあ」と明かしていることから、明らかである。

この作品のすばらしさと、読者に感動を与えることの大きな要因の一つが、これらの五人の婦女子のみごとな造型であろう。彼女たちは、乳飲み子の時に棄てられてしまった不幸で憐れな境涯にありながら、それぞれ過去を恨んだり、卑屈になったり、ひねくれたりすることのない人物像として描かれている⁽⁷⁾。

例えば、主人公が宿を訪れた際、「『おや、おいでなさいませ』」と言って、なお愛想よく『さあどうぞ、奥へあがつてつかさいませ』と言った」オカネ婆さんとオギン婆さんのや、就寝前の主人公に、「そんなら、おやすみなさいませ。ええ夢でも御覧なさいませ、百石積みの宝船の夢でも見たがよございますろう」という「豪華な愛想」を明るく語るオギン婆さん、また、行商人の宿泊客に親に棄てられたという身の上を語るオクラ婆さんは、棄て児の身の上を臆することなく、自然に語っている。

さらに、二人の子供たちは、主人公が宿に着いた際、「客間兼自家用の居間」と見られる部屋で、「お互いに向い

あつて同じ机について、「読本の書き取りをしていたが、部屋を通りぬける私を見ると黙ってお辞儀を」する「なかなか利口そうな子供」に育っている。このように、五人には、不幸な境遇による暗さがなく、貧しさの中にあつても、与えられた境遇に不平不満を託つこともなく、「知足」の精神に立つて生きる、素直で真面目で誠実な人物像として描かれている。棄て児の婦女子たちは、なぜ、このように慎ましく明るく育ち、齢を重ねることができたのであろうか。

さらに、この宿屋の特殊なしきたりとして、棄児に、「親の名や人相」は知らせないことになっていることや、男の子の棄児は、「太うなつて縮尻^{しじ}」る、つまり、男の子は活動的であり、成長すると親を探しに行ったりすることと考えられ、さらに当時は「男女七歳にして席を同じうせず」という倫理道德観も健在であり、同じ宿で育てるわけにもゆかないため、引き取ることをせず、「親を追いかけて行」つて嬰兒を返すか、役所に届けるということや、さらに、この宿で育つた娘は、「この家で育ててもろうた恩がえしに、初めから後家のつもりで嫁に行きません。また浮気のようなことは、どうしてもしません」と、明言している。

つまり、彼女たちは、一生、親のことを知らされることなく、独り身のまま宿で生涯を終える境遇にありながら、なぜ不平不満も抱かず、明るく生きることができるといふ理由と背景のなかに、この作品の重要なテーマが存在することは明らかであろう。それは、嬰兒（みどりご）であつた彼女たちを思いやりと慈しみによって引き取り、育ててくれた地元の人々の愛の心と、代々助け合い、共に生きてきた棄て児同士の支え合いがあつたということに他なるまい。

作中に描かれた三人の年輩の女性と二人の女の子の人物造型を通して、作者井伏鱒二は、彼女たちがどのように生きて来ることができた理由とその背景に、お遍路さんを温かくもてなす四国のその集落の篤志家の人々や、漁師たちの理解と協力と愛の心のおもてなしがあつたことを暗示している。

言い換えれば、棄て児を救う集落の人々の慈愛の心のもてなしがあったからこそ、棄て児たちは、ひねくれたり卑屈になったりすることもなく、親がなくとも明るく育ち、後輩にあたる次の棄て児を共に暮らしつつ育て上げ、自分を育ててくれた集落の人々に恩返しをしつつ、生き続けたことが現されているのである。

この棄て児救済の「へんろう宿」は、まさに棄児たちにとっての四国遍路に存在する、あたかも仏の慈悲が現世に現れ出でた「浄土」であり、八十八か所札所に次ぐ霊場、あるいは、番外の、八十九番目の霊場であったと解釈することもできるのではないだろうか。

四 作者の表現の特色

短編小説『へんろう宿』では、井伏鱒二の、巧みな表現手法として、人物造型の他にも、「暗示的表現手法」、「棄て児たちの救いの宿という空間とテーマを際立たせる表現手法」「凝縮された象徴表現」などが、それぞれ考えられる^⑧。次に、それぞれについて考察を進めたい。

1 暗示的表現技法について

(1) 「波濤館」という別名称による暗示

本作品では、地名を「遍路岬村黄岬」とし、その地にたった一軒しかない通称「へんろう宿」の正式な名称を「波濤館」と名づけることによって、宿の背後に存在する太平洋に面して広がる砂浜と、季節や気候の変動によって大きく高い波が打ち寄せる雄大な海が存在を、さりげなく「暗示」する表現手法を用いていると考えられる。

周囲の自然の情景や土地の状況は、詳細に直接的に描写する表現はあえて行わない、簡潔平明で抑制の利いたいわゆる省筆の表現手法である。それだけに、読者は省筆されている広く深い作品の世界を連想しつつ、鑑賞するこ

とが要求されており、読み手の読解力が試されている、巧みで優れた表現技法である。

また、「波濤館」という名称は、太平洋に面した荒波を暗示するだけでなく、そこに暮らす女性たちの人生をも暗示する巧みな象徴的表現と考えられる。

(2) 二人の少女の年齢が示す境遇

次に、細かいことであるが、へんろう宿に暮らす二人の少女の境遇は、作品の結末の宿の戸口に付けられている名札の描写によって、暗示されている。

また、二人の少女は、遍路岬村尋常小学校に通う児童という設定であり、「柑乃オシチ」「柑乃オクメ」という名前で、一方は、「十二ぐらい」、もう一方は「十五ぐらい」に見えることから、彼女たちも棄て児であることが示されている。この二人の名字が「柑乃」姓であることから、へんろう宿の三老女とは全く血のつながりはなく、あえて「柑乃」という姓を用いていることがうかがえる。甘い「蜜柑」ではなく、甘みも少なく酸味のあるより小さい「柑子^{こうじ}」のイメージを少女たちに重ね、「柑乃」と表現していることにも、作者のユーモアのセンスの片鱗が窺える。

「十二ぐらい」の柑乃オシチと「十五ぐらい」の柑乃オクメが、六歳から十一歳まで就学するはずの尋常小学校に通っている、という設定から、棄て児である二人の、正確な年齢が不明であることや、たとえ就学年齢が不明であり超えていたとしても、学習の機会を与えるへんろう宿の老女たちや、地域の人々の温かい配慮があることを暗示していると考えられる。

さらに、老女たちの名前が、オカネ、オギン、オクラという「富」の象徴を暗示しているのに対し、二人の少女たちは、オクメ、オシチという当時の巷の子供たちの命名にかなうであろう名前になっており、三老女との世代の

隔たりを表していることも、行き届いた表現であろう。

なお、極老のオカネが八十歳を超えている設定からも、この宿の年輪、つまり、何代にもわたって、このへんろ宿が存続し続けてきたことが、暗示されていると考えられよう。

(3) 漁師屋の転用による宿の暗示する世界

第三に指摘できるのは、本作品では、「へんろう宿」が、漁師屋を転用して営まれているという設定である。

主人公がこの宿を見て、「漁師屋をそのまま宿屋にしたのだろう」と考え、「入口の障子や低い軒の具合が平凡な漁師屋と変わりな」い、と表現していることから、宿となっている家屋は、元は漁師屋であったことが示されている。そして、その家屋で、現在、棄て児の五人の婦女子（子ども二名を含む）が、宿屋のお蔭で自活できているのである。つまり、へんろう宿は、そもそもへんろう宿に棄てられた不憫な女の嬰兒を、そのまま自営、自活出来るようなシステムとして構築し、支え、見守り続けてきた、地元の篤志家や漁師の人々たちの温かい思いやりと慈しみと愛の心によって始められた宿であることが暗示されている。

そして、お遍路さんが置いていった不憫な棄て児たちに対する、この土地の人々や漁師たちの接し方は、まさに四国遍路における「お接待」の心そのものである。

弘法大師空海の霊場八十八か所を巡拝する「お遍路さん」と、そのお遍路さんを、温かくもてなすことで、自分たちも仏の救いに連なりたいという宗教的な願いと祈りに基づく、巡礼者への温かいもてなし「お接待」が、四国の人々の、仏の慈悲に連なる慈愛の精神の現れとして現実存在している。そして、このお接待が、お遍路さんたちの心に感謝の「接待返し」を生み出すのである。

すなわち、「へんろう宿」に暮らすこととなったお遍路さんの棄て児の婦女子たちは、自らの暮らしのために、

宿を営むだけでなく、自分たちが人々から受けた温かい愛の「お接待」に対する恩返しとして、今度は、宿に棄てていかれた嬰兒をそのまま引き取って育てるという、「接待返し」を実践していると読み取ることも可能である。

2 二度の「眠り」の設定による、棄て児たちの救いの世界の表出

「棄て児たちの救いの宿」とそのテーマへ移入させる表現手法として指摘したいのが、「眠り」である。作品の冒頭において、主人公が「バスのなかで居眠りをし」た設定により、主人公がへんろう岬にある「へんろう宿」という異次元の世界へと移入する仕掛けとして用い、読者を作品世界に巧みに導入している。

さらに、「眠り」は、この小説のクライマックスの「転」の冒頭にも、主人公が眠りにつく場面を、再び設定している。「顔の上にハンカチをかけ、その上に蒲団をかけ」て、「二時間も眠った」後、隣から聞こえてきたおクラ婆さんの話から、へんろう宿の真相を知るという設定がなされている。また、その真相を知ったあと、再び、「ハンカチでまた顔を覆い、その上に蒲団をかぶって眠ることに」している。

この、「眠り」により異次元の世界へと移入し、再び現実世界へと回帰するという設定によって、作者は、「棄て児たちの救いの宿」、すなわち四国遍路の現実においてあたかも仏の住む浄土が存在するかのような「へんろう宿」の存在の謎と、秘密とを、巧みに際立たせる効果を生み出していると言えよう。

3 末尾の表現が意味するもの

次に、巧みな表現として指摘できるのは、わずか二行の結末の自然描写である。

その宿の横手の砂地には、浜木綿が幾株も生えていた。黒い浜砂と、浜木綿の緑色との対象が格別であった。

この、作品の末尾にのみ記述された自然描写、黒い砂地に生えている幾株かの緑色の浜木綿の描写は、作品集『鸚鵡』（昭和十五年五月）に収録された際に加筆されたものであるが、「へんろう宿」の世界を際立たせる見事な対比的効果を生みだし、地元の人々の愛によって救われ、宿で健気に生きる棄て児の婦女子たちの数奇な人生と健気な生き方とその存在が、砂地にしっかりと根付いて生きている鮮やかな緑の浜木綿のイメージとして、象徴的に表現されていると考えられる⁹⁾。また、「黒い浜砂と、浜木綿の緑色との対象が格別であった。」（傍点引用者）と表現されており、「黒い浜砂」と「浜木綿」との「対照」（コントラスト）と表記されていないのは、あくまでも両者の対比ではなく、作者が、浜砂とそこにしっかりと根付いている浜木綿そのものの存在をへんろう宿の婦女子たちの象徴としての表現対象として意識し、読者にもそれを伝えようとしていることの現れであろう。なお、浜木綿は、別名浜万年青（はまおもと）とも呼ばれ、「おもと」は「万年青」とも表記されることから、作者は棄てられた嬰兒の生命力を暗示していると理解することも、可能であろう。

五 作品のテーマについて

以上の作品世界の分析から、この作品のテーマは、肉親の愛を知らない哀れで恵まれない棄て児たちと、いかなる事情があるにせよ愛児を棄てざるを得ない母親に対する、地元の人々の思いやりと慈しみと温かい愛、そして、棄てられたものの、へんろう宿で自立して、代々生きてきた婦女子たちの強い絆と温かい愛の生涯であると考えられよう。

さらに、お遍路さんに対する地元の人々の「お接待」という究極の愛の行為であり、棄て児たちにとっては、四国遍路に秘かに営まれた宿における救いと癒やし、とも言えるであろう。

また、遍路道に面した海辺の一漁師村の家を棄児救済のシステムとして考案し、実現させ、永年にわたり代々長

く存続させるには、地元の篤志家や、心温かい村人たちの並々ならぬ支援態勢と理解とともに、広く深い仏の慈悲の心が欠かせなかったものであり、八十八カ所の霊場の各寺院は、そのまま仏のおわす極楽浄土とも考えることができる。してみると、へんろう宿は、作者の作り上げた、無数の読者に対する、言わば、八十九番目の仏の慈悲を現実世界に伝え広める霊場とも考えることができよう。四国の全土に広がる弘法大師空海の霊場を背景とするこの「宿」こそは、仏のもたらしたこの世の霊場とも思われるのである。

なお、井伏は、昭和四年三月、三十一歳の時に発表した作品『朽助のいる谷間』においては、主人公朽助の娘とアメリカ人との間に生まれた孫娘「タエト」の存在を通して、キリスト教による信仰と救い、を描いている。そして、『へんろう宿』では、仏教における弘法大師空海による救い、四国遍路の巡礼者と巡礼者をもてなす土地の人々の温かさ、などに対する深い理解があり、それを基盤として、独自の文学作品を構築していることを評価すべきと考える。

このように考えてくると、井伏鱒二という作家の見識の深さ、仏教やキリスト教などの東西の宗教に対する理解の深さとともに、各宗教の内に秘められている愛と慈悲の心を巧みに作品化した、見事な短篇名作と評価することができよう。

さらに、本作が発表された昭和十五年は、翌年に太平洋戦争が勃発する戦時色の濃い時代であるが、そのような時局の中、人間にとって最も重要な、他者への思いやりや愛、宗教による救いについて描いていることについても、高い評価が与えられるべき作品と思われる。

なお、昭和二十五年に発表された『遙拝隊長』は、反戦平和などのスローガンは表に出されことなく、弱者に対する村人たちの慈しみと思いやりとが、見事に描かれた名作短編である。『朽助のいる谷間』ではキリスト教の

隣人愛を、『へんろう宿』では仏教の慈しみと思いやりの慈悲を、それぞれテーマとして描いたあげく、昭和二十五年の『遙拝隊長』で、宗教を離れて、人間としての愛の行為の発現のドラマとして、悲劇の母と狂った悠一への村人たちの思いやりと慈しみという、人間が本来抱いている愛の心を、宗教から離れて、一人の作家として創出しているのは、僭越ながら作者の見事な大成と思われるのではない。これらの作品群から、作者井伏鱒二の心中深く存在していた文学テーマの一つとして、広く深い人間愛が存在していることを、ここに指摘しておきたい。

注

- (1) 伴俊彦「井伏さんから聞いたこと その二」(『井伏鱒二全集』第三卷付録 月報4 昭和三十九年十二月 筑摩書房)
- (2) 例えば、松本武夫「『へんろう宿』論」(『立正大学文学部論叢』一九九八年三月)は、『へんろう宿』は、明らかに井伏鱒二の『空想』で書いてみたものであり、『へんろう宿』は実存していない。それ故にこそ井伏鱒二は『空想』を駆って、この『妙な一家』の内に自らの『思想』を存分に流しこんでいる。」と述べている。また、榎本隆司「井伏鱒二『へんろう宿』」(『國文學 解釈と鑑賞』一九七八年四月)は、「バスの車窓に見た小さなへんろう宿から、井伏はこれだけの話をつくり上げた。いわばそれは観念の所産である。この場合観念とは、文字通り感じ念ずるの謂に近い。」としている。さらに、中谷克己「井伏鱒二『へんろう宿』考」(『帝塚山芸術文化』一九九五年三月)では、「井伏の筆は、恩師の病氣という緊迫した状況にあっても、あるいはまた、大きくは昭和十五年という(戦時色がだんだん濃くなっていた)時代にもかかわらず、そうした現実の表層とは無関係に、自己の想像力がきりひらく世界に向けて始動したのである。」と述べている。なお、湧田佑氏は、『へんろう宿』の「発表の二箇月前、井伏は田中貢太郎の病氣見舞のため安芸市の小松屋旅館を訪れている。その際の見聞がモデルとされていると推察される。」と述べている(『井伏鱒二事典』平成十二年十二月 明治書院)。
- (3) 四国遍路に関する文献を調べてみたものの、管見では、作中に描かれているような、「棄て子救済の宿」や棄て子救済のシステムの実態についての記載は、見られなかった。ただし、遍路が貧困や事情により、通りすがりの四国の家や商店、寺などに棄て児をする例があったことについては、いくつか事例の記載が見られる。
- (4) この論文における『へんろう宿』本文の引用は、『井伏鱒二自選全集』第一卷(昭和六十年十月 新潮社)に拠る。なお、

旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。

- (5) 井伏が、本作品を書くきっかけとなった、室戸岬に行くバスの中から見たというへんろう宿は、「二階建ての小さな宿屋」と記されていたが、作中では、あえて「平屋ばかりの人家がなら」ぶ部落にあるへんろう宿と設定している。

- (6) この三人の女性たちの年齢については、主人公が、当初、オギン婆さんについては、「六十ぐらいのお婆さん」、また、三番目のオクラ婆さんについては、「年のころ五十ぐらいの女」と評していたり、その後「三番目の六十ぐらいの婆さん」と述べていたりして、齟齬が見られるが、これは、あくまでも年齢を推測する表現であり、棄て児であることから考えれば、実際の年齢は分からないことを示す設定と考えられる。なお、オクラ婆さんが、「たいがい十年ごとといに、この家には嬰兒が放つたくられて来ました」と、隣の宿泊客に語っていることから考えると、オカネ婆さんは七十五歳ぐらい、オギン婆さんは六十五ぐらい、オクラ婆さんは、五十五ぐらいという年齢設定と考えられる。

なお、作中に「この宿屋には客間が三部屋しかなくて宿屋としては貧弱きわまるが、意外にも女中が五人いる。」という記述があるが、この五人とは、老女三人と児童二人のことを指していると思われる。二人の児童は、小学校に就学しており、老女達と年齢の開きはあるものの、老女たちの死後、この宿を営んでいくため、家事、宿屋経営の手伝いを当然していることが考えられ、女中に含めていることは、不自然とは考えられない。また、十年ごとに棄て児が棄てられるとのオクラ婆さんの発言からすると、老女たちと女児二名との間に中年もしくは若い女性の存在が考えられるのではとの解釈から、作中には具体的には登場しないものの他に二名の女性が存在すると解釈されるかもしれない。しかし、作品に描かれたこの宿の家屋の構造（入り口の居間の他、襖で仕切られた狭い客間三部屋のみ）や、他に女性が存在することを暗示する作者の表現の見て取れないことから、この宿に暮らす女性性は、老女三人、女児二人とみるのが妥当であると考えている。

- (7) 極老の「オカネ婆さん」は八十ぐらいの長寿の老婦人だが、当時の平均年齢が五十歳に満たなかったのに、この年齢であり、また、他の二人も五十を越していることは、「へんろう宿」の生活環境が良かったことの証として設定されているのである。

- (8) 井伏の表現の特色として、東郷克美氏は、「表現は十分に抑制されている。その淡々として語り口からわずかにこぼれるものを読みとることが、この作品を鑑賞するための第一要件である。」と述べている（『へんろう宿』―作品の深さについて―）（『國文学 解釈と鑑賞』一九八五年四月）。

- (9) この自然描写について、東郷克美氏は、「この宿でくりかえされて来た愚かし^ヤくも悲しい人間の営みは、悠久の時間からみ

れば、「浜木綿」によって代表される自然と変りないのである。」と述べている（前掲論文）。また、中谷克己氏は、「この最後の自然描写には、周縁の地で自分たちに負荷された不幸な運命に屈託することなく生き続ける（生き続けた）女たちの人々が象徴されている。」と指摘している（前掲論文）。

【参考文献】

星野英紀・浅川泰宏『四国遍路 さまざまな祈りの世界』二〇一一・四 吉川弘文館

『別冊歴史読本 四国お遍路88ヶ所』平成二十六年四月 角川書店

愛媛県生涯学習センター編『四国遍路のあゆみ』二〇〇一年

愛媛県生涯学習センター編『遍路のこころ』二〇〇三年

Masuji Ibuse's *Pilgrim's Inn*: The Hidden Inn for Abandoned Babys

TAKEDA Hidemi

Abstract Masuji Ibuse was a famous writer of the Showa period, whose short novel *Pilgrim's Inn* is considered to be a story he wrote based on a “fantasy” he imagined when spotting a small inn from a bus window on his way to Cape Muroto. It has even been suggested in prior research that this work was a creation of the author's imagination. However, the setting of *Pilgrim's Inn* and the characters it portrays exude such a powerful presence and sense of reality that strong doubt remains as to whether or not it was indeed a mere “fantasy”. This is because the idea of a pilgrim's inn being built on the pilgrim trail and the abandoned infants being saved, nurtured and continuously supported by the hospitable hearts of coastal inhabitants seems to exceed the boundaries of one author's imagination. It cannot be denied that Ibuse may have known about a similar establishment, based his story on it, and that he may have insisted it was a creation of his fantasy in order to protect the females of the inn from the curiosity of the world.

This story is so brilliantly configured, with the shabby inn which was once a fishermen's hut and the stage where the marvelously-created characters of three old women and two young girls tell the story of the thoughtfulness and warm love of the locals towards the abandoned children who have never known the love of their own parents and the pilgrim mothers who were forced to abandon their beloved children. The story also depicts how the women and children rise above their abandonment, gaining independence in the pilgrim's inn and forming a strong bond and warm love as they live out the generations.

The Valley of kuchisuke to live in, a book released by Ibuse in March of 1929, portrays the love and spirit of Christianity and salvation through the protagonist, Kuchisuke, and his mixed blood granddaughter “Taeto”. In contrast, *Pilgrim's Inn* tells a tale of Buddhist compassion and salvation, and deserves high acclaim for being based on a deep understanding of the warm “hospitality” shown by local inhabitants to the pilgrims who travel the Shikoku pilgrim trail.

Pilgrim's Inn is an excellent piece of writing by an author with extraordinary aptitude, sensibility and creativity, with a deep underlying theme of those elements

井伏鱒二『へんろう宿』——棄て児を救う隠れ宿——

most important to human beings — thoughtfulness and love towards others — as well as the salvation of Buddhism, based on a sincere look at “raw” humanity and a deep understanding and knowledge of Buddhism.

Keywords: Buddha's salvation in Japan, The culture of Shikoku pilgrims, salvation of abandoned babies